FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2020.6.24　No.61

令和２年度夏季特別展

天下人の時代 ―信長・秀吉・家康と越前―

現在、明智光秀を主役とするテレビドラマの放映や、さまざまな関連イベントの実施により、戦国時代への関心が高まっています。

戦国の乱世から天下の統一へ。激動する時代のなか、多くの武将たちが活躍しました。そのなかでも馴染み深いのが織田信長・豊臣秀吉・徳川家康といった「天下人」ではないでしょうか。江戸時代の狂歌「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、すわりしままに食うは徳川」は大変有名です。

しかし、「天下人」になるための歩みはそう簡単なものではありませんでした。本展では、こうした「天下人」の動向について、とくに越前との関わりを通じて紹介します。

そして、その際に注目したいのが合戦です。武将たちは自身の命運をかけて過酷な合戦に挑みましたが、実は、天下の大局を決する合戦に越前が大きく関与していました。

そこで、合戦の様子を克明に描いた合戦図屏風を展示の中心に据え、肖像画や古文書なども含めて展示することで、「天下人」の動向に迫ろうと思います。

１. 信長と越前

(1) 姉川の合戦と朝倉氏の滅亡

尾張と美濃を掌握して「天下布武」を掲げた織田信長は、永禄11年(1568)に室町幕府将軍の足利義昭を奉じて上洛し、一挙に政治の中心に躍り出ました。その後、自身の実力を見せつけるべく、近隣の大名に上洛を促しましたが、越前の雄、朝倉義景は信長の要請を拒否しました。信長にとって、畿内の背後に位置する朝倉氏は無視できない存在であったため、永禄13年(1570)4月、信長は朝倉氏を討つべく兵を発し、ここに信長と朝倉氏の対立は決定的となりました。信長は同盟関係にあった三河の徳川家康と連合し、越前の敦賀まで侵攻しましたが、やはり同盟関係にあった北近江の浅井長政の裏切りにより、いったん敗走することとなりました。

信長はすぐさま反撃の準備に取り掛かり、元亀元年(1570)6月、家康とともに、浅井氏攻めを開始しました。一方、朝倉氏は浅井氏に加勢しました。織田・徳川勢と浅井・朝倉勢は北近江の姉川を挟んで対峙し、数時間にわたる戦いの結果、織田勢の圧勝に終わりました。これが姉川の合戦です。浅井・朝倉勢は有力武将を失うなど大きな痛手を蒙りましたが、すぐさま滅亡したわけではなく、その後も信長と敵対し、石山本願寺や甲斐の武田信玄などとともに反信長勢力を形成して信長を苦しめ続け、天下の大局に影響を与えました。

しかし、信長は元亀4年(1573)7月、ついに室町幕府を滅ぼし、8月には満を持して浅井氏攻めを開始しました。朝倉義景は浅井氏を助けるべく出陣しましたが、途中、織田勢の攻勢を受けて撤退を決意、その後、信長の追撃によって大敗し、多くの有力武将が戦死しました。義景は本拠の一乗谷から大野郡へと逃れましたが、一族の景鏡(かげあきら)の裏切りにあって自害しました。さらに、信長はすぐさま越前から北近江へと反転し、浅井久政・長政父子を自刃させました。これによって、朝倉氏・浅井氏は滅亡したのです。

姉川合戦図屏風　部分(本多忠勝、真柄直隆など)
当館所蔵

(2) 信長家臣の越前支配と一向一揆の蜂起

朝倉氏を滅ぼした信長は、直臣や朝倉氏旧臣に越前の統治を任せました。明智光秀・羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)・滝川一益の3名が信長の朱印状にもとづき戦後処理に当たっていたことを示す文書も残っています。

しかし、朝倉氏旧臣同士の争いをきっかけにして、一向一揆が蜂起、朝倉氏旧臣や信長直臣のみならず、他宗派の寺院までも攻撃し、勢力を拡大させました。越前は加賀と同じく「一揆持ち」の国となったのです。

これを重く受け止めた信長は、天正3年(1575)8月、大軍を率いて越前へ出陣し、一向一揆を徹底的に攻めました。越前を再制圧した信長は、北庄への築城を命じ、重臣の柴田勝家に越前の大部分の支配を任せ、「越前国掟」を定めるなど、新たな統治方針を示しました。

信長は、畿内から北陸へと抜ける道の玄関口にあたる越前を押さえ、勢力を北陸方面へも拡大させていき、天下統一への歩みを一層進めていきました。

2. 秀吉と越前

(1) 本能寺の変後の情勢と賤ケ岳の合戦

信長は敵対勢力を次々と攻め破り、天下統一が目前に迫っていました。しかし、天正10年(1582)6月、家臣である明智光秀の裏切りにあい、本能寺で自害しました。いわゆる「本能寺の変」です。これによって、天下の行方は大きく変わることになりました。

当時、北陸に滞在していた柴田勝家は情報収集などに手間取っていました。その間、中国地方攻略を担当していた秀吉は、「中国大返し」を行い、山崎の合戦で光秀を攻め、主君の仇を討ちました。後世に「三日天下」と揶揄された光秀はまさに「天下人」になり損ねたのです。

その後、秀吉は政局を有利に進め、勝家との対立が決定的となりました。そして、天正11年(1583)3月、ついに羽柴勢と柴田勢は北近江の賤ケ岳周辺で対峙しました。はじめは柴田勢が優位でしたが、柴田側の前田利家などが戦線離脱したことにより、羽柴勢が勝家の本陣へと迫り、勝家は北庄へ撤退しました。いわゆる「賤ケ岳の合戦」です。羽柴勢はすぐさま勝家を追って北庄城を包囲し、勝家は城に火を放って妻の市とともに自害しました。天下の覇権をめぐる織田家旧臣同士の争いは秀吉に軍配が上がったのです。

(2) 秀吉時代の越前支配

勝家を破った秀吉は、織田家旧臣を取り込みつつ、四国・九州・関東・奥州などの反抗勢力を次々と平定していきました。また、朝廷より関白(事実上の公家の最高位)に任じられ、豊臣姓を賜りました。ここに、秀吉は名実ともに「天下人」となり、天下統一を果たしたのです。

それでは、この秀吉のもとで、越前の支配はどうなっていたのでしょうか。勝家の居城であった北庄城のあとには、賤ケ岳の合戦で秀吉に味方した丹羽長秀が入りました。丹羽氏のあとは、堀秀政・堀秀治、小早川秀秋、青木一矩が入るなど、目まぐるしく領主が変わりました。その他、大谷吉継などの諸将も越前各地の城へ入り、秀吉時代の越前支配が展開しました。

3. 家康と越前

(1) 関ヶ原の合戦と結城秀康の越前入国

慶長3年(1598)8月、秀吉が亡くなりました。秀吉没後は、五大老・五奉行が政務を担い、朝鮮からの撤兵などを進めましたが、五奉行の一人である石田三成と秀吉子飼いの武将である加藤清正らの対立が激しく

賤ヶ岳合戦図屏風　右隻　部分(羽柴秀吉、七本槍、柴田勝政など)
勝山城博物館所蔵

なり、政治的緊張が高まりました。五大老の一人である家康はそうした状況をうまく利用しながら、次第に権勢を強めていき、秀吉の定めた掟や法を無視する動きを見せ、ついには「天下殿」と認識されるまでに至りました。

慶長5年(1600)、家康は会津の上杉景勝に狙いを定め、上洛を要請、景勝が上洛を拒否すると、それを理由にして景勝討伐の兵をおこしました。これを好機とみた三成は、家康打倒を掲げた檄文を諸大名に発して出陣しました。家康の軍勢(東軍)は途中で取って返し、ついに同年9月15日、美濃西部の関ヶ原で三成の軍勢(西軍)と激突しました。いわゆる「関ヶ原の合戦」です。当初、両軍は一進一退の攻防を繰り広げましたが、西軍の小早川秀秋をはじめとする諸将が東軍へ寝返り、わずか一日で東軍の勝利に終わりました。西軍の首謀者の三成は捕らえられ、斬首となりました。一方、家康は実質的に天下の実権を握ることとなり、残る敵は秀吉の遺児である秀頼のみとなりました。

なお、関ヶ原の合戦では、関ヶ原のほか、全国各地で東軍と西軍に分かれた合戦が行われました。越前でもそうした状況が見られます。とりわけ、敦賀の大谷吉継は西軍につき、越前の諸大名を調略し、東軍についた加賀の前田利長と戦い、これを退却させたのち、関ヶ原へと参陣し、小早川秀秋の急襲により命を落としたことは有名です。

また、家康の次男である結城秀康は、関ヶ原の合戦の際、東軍の一員として、関ヶ原から遠く離れた宇都宮にて上杉景勝軍の南下をとどめるために布陣しました。

関ヶ原合戦図屏風　右隻　部分(大谷吉継など)
敦賀市立博物館所蔵

合戦後は、その功により、越前68万石を与えられました。その後、越前松平家の礎を築くこととなります。

(2) 越前松平家と大坂の陣

慶長19年(1614)11月、家康は天下取りの総仕上げとして、秀頼のいる大坂城を包囲し、攻め始めました(冬の陣)。松平忠直(結城秀康の息子)が率いる越前勢も参加しました。ただ、大坂城の出城である真田丸にこもる真田信繁(幸村)の奮戦にあうなど、たやすく城を落とすことはできませんでした。

いったん講和が成立するものの、講和条件に不満をもった大坂城勢と家康は再度対立しました。慶長20年(1615)5月、家康は大坂城へ向けて出陣し、大規模な合戦が行われました(夏の陣)。戦いのさなか、真田信繁が家康の本陣に突撃し、一時、徳川勢を混乱させましたが、越前勢に討たれました。越前勢はそのまま進撃し、本丸を占領することに成功、秀頼とその母の淀殿は自害し、ここに豊臣氏は滅亡しました。

家康は名実ともに「天下人」となり、徳川幕府の支配による「泰平の世」が250年余り続くことになります。

大坂夏の陣図屏風　右隻［複製］　部分(真田幸村など)
大阪城天守閣所蔵

ここまで述べてきた「天下人」の動向につき、関連する貴重な資料を数多く展示します。ぜひ、天下統一への歩み、合戦での武将たちの息吹を体験しに来てください。

(大河内勇介)

特別展　天下人の時代 ―信長・秀吉・家康と越前―

開催期間：令和2年7月18日(土)～8月31日(月)　会期中無休
観覧料：一般400円　大学・高校生300円　小中学生・70歳以上の方200円　※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

寄託資料紹介

疱瘡（ほうそう）見廻受覚帳

［法　量］縦38×横14.5×厚0.4(㎝)
［時　代］万延元年（1860）

令和2年(2020)、新型コロナウイルス感染拡大により、日本はもとより世界各地に大きな影響が及びました。現代医学の知識と技術をもってしても、とくにワクチンがない場合、感染の拡大を食い止めることが難しいことが浮き彫りになったといえるでしょう。

では、過去の人々はどのように病とたたかっていたのでしょう。その一端を垣間見る資料として「疱瘡見廻受覚帳」をご紹介します。

この資料は、福井県内の個人宅に残されていたもので、万延元年(1860)にその家の姉妹があいついで疱瘡(天然痘)に罹患したときの見舞品の一覧です。併せて、姉妹それぞれの発症から治癒までの経過や看病、投薬のようすも記録されていました。ここでは、姉に関する記述を中心に内容を見ていきます。

形状は長帳で、表紙には「萬延元庚申閏三月七日晩ヨリ／疱瘡見廻受覚帳／當家〇〇〇二女つね七才」(〇〇〇は個人名)とあり、発症の年月日と病人の名前、年齢が記されています。帳面の1～3ページは見舞品の目録で、菓子やせんべいなど、子供向けの品目が並びます。つづく4～5ページに発症から治癒までの経過が記述されています。

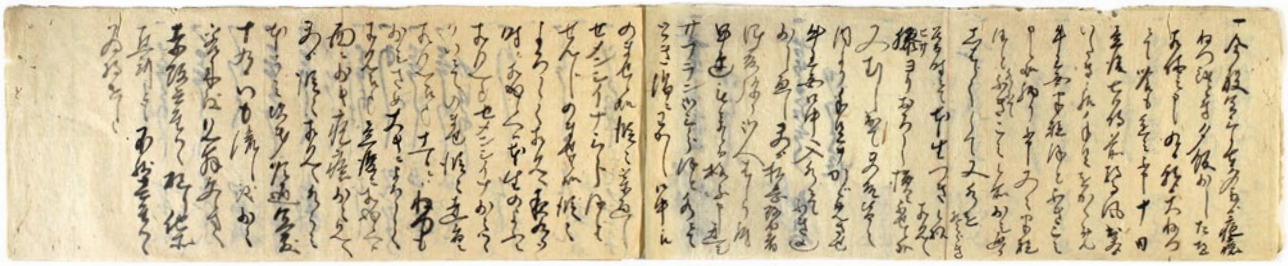
まず、閏3月7日の夜、つねに「疱瘡ねつ」が発症し、夕飯を少し食べた後、休んでいます。9日朝に「大ねつ」を出して食も進まなくなり、翌10日の「昼後七ツ」(午後5時～8時ごろ)には「驚風」、つまり引付け(痙攣)の症状が出ました。そのため、かかえて手足をかがませ、「牛王圓（ごおうえん）」(※)という薬を飲ませています。いったんは落ち着いたものの、膝から下ろして横たえると、また「むし出て」(引付けが再発)、再び牛王圓を服用させました。医者に様子を知らせて「サフラン」、「セメンシイナ」(ともに漢方薬)を飲ませたところ夜中ごろに「段々よろしく相見へ」、11日には「ねつも少シさめ大キニよろしく相見え申候」と回復に向かったようです。その後、発疹が現れて「水うミ本うミ次第順通」と膿が出て体調が戻り、19日には疱瘡神を送り出す「いも流し」という行事を行っています。

発熱から始まって引付け、高熱、いったん熱が下がってから発疹が出て水疱、膿疱を経て半月ほどで回復するという経過は、疱瘡の典型的な経過とも矛盾しません。また、3月27日に妹(2歳)も発症しますが、疱瘡の潜伏期間(12～16日)を考え合わせると、姉の発疹期(この時期がもっとも感染力が強いとされます)であった3月11日以降に感染したものと考えられます。

じつは、嘉永2年(1849)には、笠原良策(白翁)らにより、疱瘡予防に効果の大きい「種痘」(ワクチン接種)が福井でも開始されていました。しかし、種痘がすみやかに普及したわけではなかったことは、こうした記録からもうかがえます。

（瓜生由起）

(※)牛王圓：福井藩の医家・三崎家の家伝薬「牛黄円」か。



「一　今般閏三月七日夕方ゟ疱瘡
ねつ致候ニ付夕飯少したへ
相休ミ申候九日朝ゟ大ねつ
ニて喰も進ミ不申十日
昼後七ツ時前驚風出夫ゟ
いたき候様手足をかゝめ
牛王圓半粒ほとふきこミ
申候処納り不申又、半粒
ほと水にてふきこミ候所少シ通り
しはらくして又水をそゝき
暮時ニて本生つき候様相見へ
膝ヨリおろし横ニふせ候処
又むし出て夫故皆々
内より手足ヲかゞめさせ
牛王圓口中へ入水ニてふき込
少し通し夫ゟ松岡医者
伊藤弥、弐人はしり附
早速被参候而様子申達し
サフラン弐三分ほと水ニて
とき湯ニわかし口中江
のませ候処段々薬通し
セメンシイナ三分ほと
せんじのませ候処段々
よろしく相見へ夜九ツ
時ニ相成候へハ本生のよふニ
相見申候セメンシイナ少しツ、
かいニてのませ段々達者ニ
相見江申候十一日ニハねつも
少シさめ大キニよろしく
相見江申候昼後ニ相成候へハ
(小)
面ニ少キ疱瘡少々見へ
夫ゟ段々相見へ水うミ
本うミ次第順通宜敷
十九日いも流し致少々
客来致見舞受候方へ
赤飯壱重ツ、配り他所
近所とも不残壱重ツ、
為持遣し申候」

館蔵資料紹介

『ふくゐ』創刊号

［法　量］25.5×18.2(㎝)
［時　代］昭和11年（1936）

『ふくゐ』は、昭和10年(1935)に福井市で設立された福井観光協会が直営事業として発行していた雑誌で、昭和11年に創刊されました。郷土史家で、同協会幹事の山下與平が編集を担当していました。

福井観光協会の事務所は福井市役所におかれていました。同会は、福井市とその付近にある名所や史跡を紹介・宣伝して、観光客の誘致を図ることを目的とするもので、そのために、案内や接遇の改善、観光地の施設の充実や改善などに取り組むとされました。会長には福井市長が、副会長には商工会議所会頭がそれぞれ就いており、役員には福井市や商工会議所の幹部、交通や観光業に関連する企業の社長、県内マスコミの関係者が名を連ねていました。

この雑誌には、「本協会記事」として、「昭和十年度の事業概要」が掲載されており、ここから設立当初の福井観光協会が、PR用印刷物の発行、福井市内の名所への案内看板の設置、観光関係者を集めた懇談会や講習会を行っていたことも分かります。

『ふくゐ』の表紙は、福井県商品陳列所の技手であった野村浩華によるもので、山とその麓の民家を手前に、継体天皇像のシルエットを遠景に置いたもので、その横には「FUKUI」とアルファベットが記載されている近代的なデザインです。

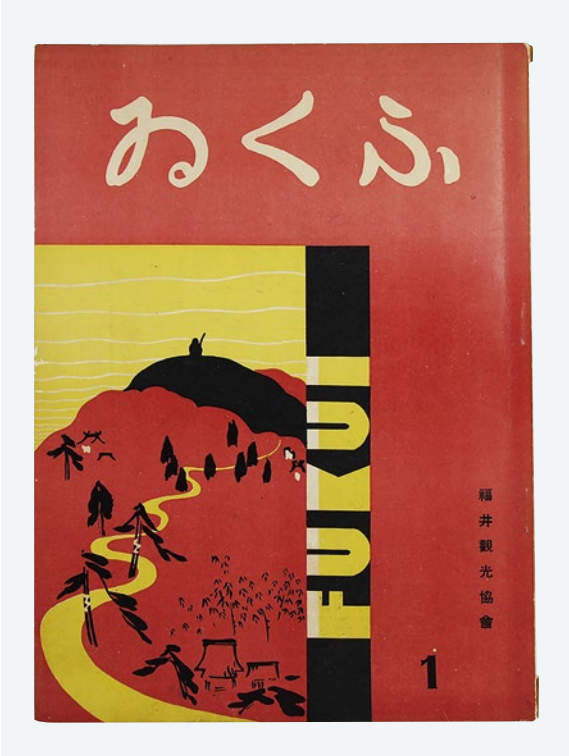
裏表紙には、福井市内にあった百貨店の「だるま屋」の広告があります。永平寺や芦原温泉、東尋坊といった観光地へ向う途中の福井駅での乗り継ぎの際に、だるま屋に寄ることを勧めるものとなっています。

掲載されている記事は、福井市長や県知事らの祝辞、旅行に関する随筆、県外出身者による福井市の印象記、郷土史の紹介などです。これらのうち、福井市長であり、福井観光協会の会長でもあった斎藤直橘は「発刊に際して」という文章の冒頭で、その観光観について「物産を有から無に輸送して、商品価値を高めると同様、人は移動して、より賢者となり、観光して商品同様無形の価値を増す、故に観光も亦一種の産業と謂ふことが出来る。」と述べています。

観光の振興が地域的課題となっているいま、本誌は、戦前・戦中期における福井県内の観光の歩みを考える上で大変貴重な資料と言えます。

なお、『ふくゐ』は、日中戦争の勃発や編集を担当していた山下の病死などもあって、昭和13年5月に刊行された第6号を最後に休刊となったようです。万一、以降の号や福井観光協会に関する資料についてご存じの方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さいますと幸いです。

（橋本紘希）



『ふくゐ』創刊号　表紙

『ふくゐ』創刊号　裏表紙のだるま屋広告

研究ノート

僧形像として見た谷野一栢像～その特色について～

仏像理解の第一歩は阿弥陀如来や観音菩薩等、像の名前を知ることではないでしょうか。仏像には個々のほとけ毎に手の上げ下げや足の運び、持ち物等のすがたが定められた「儀軌」というものがあり、特に密教では細かく定められています。このため比較的容易に名前を知ることができますが、お坊さんのすがたをした「僧形」像は一筋縄では行かないことが多いようです。僧形とは剃髪(坊主頭)で袈裟等僧衣を着用したすがたです。よく知られるのは地蔵菩薩ですが、この他聖僧文殊、賓頭盧尊者など羅漢と呼ばれる聖僧、釈迦十大弟子等伝説的僧侶や空海や親鸞といった祖師等の肖像、あるいは八幡神のような神々まで含まれ極めて多様です。今回取り上げる谷野一栢像も肖像として伝わっていますが、一旦個人名を取り外し、僧形像の一つとして詳細に見ていきたいと思います。

谷野一栢坐像(以下一栢像)が安置される高尾町薬師神社は、奈良時代神亀元年(724)鎮座とされます。中世都市・一乗谷に近く、眼病に効くとされる境内の神水「亨の水」が有名です。また、『越前国名蹟考　足羽郡下巻』宇坂郷高尾村の項には「薬師堂」とあり、「本尊立像3尺6寸行基作」と記されるのは市指定文化財の薬師如来立像と考えられますが、一栢像の記述は見えません。像主の谷野一栢は、奈良の僧侶で、中国に渡り医学を学びました。朝倉孝景に招かれ高尾村に住み、天文5年(1536)中国の医学書『勿聴子八十一難経』を出版したことで知られています。

では、一栢像について紹介します。

《谷野一栢坐像　1躯》

■形状　僧形。頭部を剃髪とする。面部は、眉を半月形とし稜は隆起させる。上瞼山形、線刻で二重を表す。鼻穴穿つ。豊齢線を表し閉口、口元を少し上げる。首筋に老相の縦皺を表す。着衣は、衲衣を左肩から胸元を通り、右脇下から左肩な掛け左腕に掛ける。覆肩衣は左肩から背・右肩を覆い、首まわりを襟状に立て胸元をV字形に合わせ、右前膊に掛け垂らす。衣紋は正面胸腹部のみ表す。足部は座るが膝は袖に隠れ、高さを殆ど表さない。両手は膝上で定印を結び、笏谷石製の玉(後補)を乗せる。

■構造　一木造　彫眼　内刳り無し。頭体から膝、手先まで含み1材製。木芯は左腹前・右肩の2箇所見られる。膝に洞と見られる穴が開く。

■彩色　現状素地。彩色の痕跡は見られない。

■台座　古い碁盤を使用(脚亡失)

■保存状態　表面全体に風雨蝕により荒れている。両袖～左肩虫損多い。鼻穴・豊齢線から口廻りは後世に当初部を彫り窪めて彫り直しか。

■法量(cm)　像高／46.0

頂～顎／16.6	面幅／13.2	面奥／16.2
耳張／16.6	肩張／34.4	胸奥／21.4
腹奥／23.7	肘張／40.7	

膝高／4.0(定印手下)　膝(袖)張／42.5
膝奥／35.7　袖裾奥／40.3

以下、一栢像の詳細について見てゆきましょう。

まず構造は、先述の通り1本の木の幹から総てを彫りだした文字通りの一木造です。像底から見ると通常、樹木の中心である木心は外しますが、一栢像は大木を輪切りにして使用していることがわかります。しかし、よくみると年輪の渦が1本の木の中に2つあることがわかります。双方の年輪はほぼ同じ大きさであることから枝などではなく、1本の木から対等に2本に分かれる夫婦木と見られます。年輪の状態からわざわざ二股に分かれる直前部分で切断したとみられ、用材に並々ならない執着があったことを伺わせます。このような彫刻のやり辛い用材を敢えて使用するのは特別な樹木、例えばご神木等霊力を宿した特別な木であることが指摘されており、一栢像の用材も同様なことが考えられます。

次に像の性格を示す形状についてみてゆきましょう。頭部の輪郭は、頭頂が扁平で後頭部が盛上り、実在感があります。お顔では、眉を少し盛上げ立体的に表します。目元は上瞼の緩い円弧や浅く彫られた眼球等優しい感じですが、瞼に彫られた細線で二重として、引き締った印象を与えます。耳も耳朶を環状とせず、肖像や神像に近いですが、厚みの乏しく耳輪を明確に表さない独特なものです。首筋の痩せよる縦皺(たてじわ)は老相を表しています。ただし、口元が不自然に窪み、長い鼻の下は間延びするのは目元の優れた造形感覚と相違し、あるいは豊齢線から内側を何らかの理由で後世に彫り直したことも考えられます。

両手に定印を結び、足を組み端座するすがたは左右を対称とした謹厳な修行僧の佇まいを見せています。定印を結ぶのは今日でも座禅でよく知られるとおり、瞑想時のすがたです。平安時代を遡る仏像では阿弥陀如来や大日如来像以外では少ないですが、鑑真和上坐像や円珍坐像のように肖像では多く見られます。また、仏教特有の座法(修行)によるためか神像でもほとんど見かけません。

体部の幅広く張った肩や大きくゴツい手、腰部が欠如しているような低い膝等は頭部から胸にいたる整った造形と異なり、非常にアンバランスです。神像では平安後期から鎌倉時代にかけ、膝の張り出しを減じ、膝を表現しない像も現われますが、一栢像の場合、膝の張り出しの退化ではなく、低くなる点で退化の感覚が異なります。あるいは特異な材を用いたことによる結果とも考えられますが、このアンバランスも一栢像の特色といえるでしょう。

以上、丁寧な目元やしっかり立てた襟等着衣に古風な様相を示す一方、像側面にみえるずんぐりとした奥行きから造像時期は、14世紀を前後する頃が考えられます。また個性的で老相を示す風貌は特定の人物を表現するようであり、僧侶の肖像を感じさせます。一方、ご神木と思しき用材へのこだわりを強く感じさせ、この点からは霊威を込めた僧形神像に近いでしょう。ただ、定印を結び端座するすがたを重視すれば「神性」を帯びた信仰対象としての「僧侶」＝羅漢や聖僧像の可能性も考えられますが、奈良・平安前期以来の信仰を受け継いだ像として、造像時期や一栢の肖像の可能性も含めてさらに検討してゆく必要があるでしょう。とはいえ、高尾町に住した医僧・谷野一栢の面影を想起させる温和な佇まいが、本像の魅力といえるでしょう。

(河村健史)

博物館日誌 （令和元年9月～令和2年3月）

9月

- 4日(水)～11月24日(日)
  写真展「真宗道場」（エントランスギャラリー）
  特設コーナー「幕末明治の福井」（常設展示室）
- 11日(水)
  「昭和のくらし」コーナー模様替え（トピックゾーン）
- 12日(木)
  福井県文書館（資料返却）
- 12日(木)～15日(日)
  資料燻蒸（殺菌殺虫室）
- 18日(水)
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料調査）
- 21日(土)
  歴博講座「写真からさぐる町の姿」（研修室）

10月

- 4日(金)
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料借用）
- 12日(土)～11月10日(日)
  特別公開「描かれた即位の礼」（オープン収蔵庫）
- 15日(火)～16日(水)
  熊本県立美術館来館（資料借用）
- 19日(土)～22日(火)
  資料燻蒸（殺菌殺虫室）
- 22日(火･祝)
  即位礼正殿の儀（入館無料）
- 24日(木)
  「昭和のくらし」コーナー秋の模様替え（トピックゾーン）
  情報ライブラリーデータ更新（画像閲覧システム）
- 26日(土)～11月24日(日)
  特別展「ふくいの鎮守さま
  ―神と真宗道場が織りなす信仰世界―」（特別展示室）
- 26日(土)
  福井県立歴史博物館運営協議会（研修室）
- 27日(日)
  特別展「ふくいの鎮守さま―神と真宗道場が織りなす
  信仰世界―」展示説明会（特別展示室）
- 31日(木)～11月1日(金)
  福井市立明道中学校職場体験

11月

- 3日(日)
  特別展「ふくいの鎮守さま―神と真宗道場が織りなす
  信仰世界―」展示説明会（特別展示室）
- 9日(土)
  フレンドリーアート号
- 16日(土)
  歴博講座「ムラの神・仏を守れ！―過疎化時代の文化財―」
  （研修室）
- 22日(金)
  橘曙覧記念文学館来館（資料返却）
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料調査）
- 24日(日)
  移動講座「最古の神像と国宝の菩薩を巡る
  ―松尾大社と宝菩提院―」（京都市）
- 28日(木)～令和2年2月25日(火)
  写真展「越前海岸のくらし」（エントランスギャラリー）
- 28日(木)～29日(金)
  ふれあい文化こどもスクール来館

12月

- 6日(金)
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料返却）
- 11日(水)
  「昭和のくらし」コーナー冬の模様替え（トピックゾーン）
- 17日(火)
  福井大学留学生来館（日本の文化講義）（オープン収蔵庫）
- 20日(金)
  熊本県立美術館来訪（資料返却）
- 23日(月)
  亀岡市文化資料館来訪（資料借用）

1月

- 3日(金)～2月25日(火)
  企画展「十二支の動物たち―館蔵資料を中心に―」
  （特別展示室）
- 5日(日)
  企画展「十二支の動物たち―館蔵資料を中心に―」
  展示説明会（特別展示室）
- 12日(日)
  ワークショップ
  「自分の干支のペーパークラフトを作ろう！」（会議室）
- 18日(土)
  歴博講座「戦国時代の文書を読む」（研修室）
- 25日(土)
  はぴりゅう来館・グリーティング
- 28日(火)
  福井県広報課SNS取材

2月

- 7日(金)
  福井県文書館来館（資料借用）
- 8日(土)
  多治見市長来館
- 16日(日)
  企画展「十二支の動物たち―館蔵資料を中心に―」
  展示説明会（特別展示室）
- 17日(月)
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料調査）
- 27日(木)～令和2年5月26日(火)（会期中、臨時休館）
  写真展「1964・東京五輪への道」（エントランスギャラリー）

3月

- 10日(火)
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料借用）
- 13日(金)
  亀岡市文化資料館来館（資料返却）
- 23日(月)
  ミュージアムシアター、番組ヒーリングコーナー、
  写真展示更新
- 26日(木)
  福井県立若狭歴史博物館来館（資料返却）
- 28日(土)～29日(日)
  新型コロナウィルス感染拡大防止のため、臨時休館

※4月4日(土)より5月10日(日)まで、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、臨時休館

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675(代)
https://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.61　令和2年6月24日発行